

2024年3月期 第3四半期決算説明会 質疑応答

実施日：2024年1月30日(火)
当社説明者： 経理部担当執行役員 堀川 健司 I R グ ル ー プ 大島 美雪(司会)

以下は、説明会における主な質疑応答を取りまとめたものです。

- Q1) 第3四半期の入園者数は良かったという理解だが、おそらく東京ディズニーリゾート40周年イベントやハロウィーンイベント効果とインバウンド効果などがあったとのことに加えて、第2四半期の猛暑による出控えからの反動増が想定以上に起きたのか。
- A1) 猛暑だった第2四半期からの振替での来園に加えて、10月・11月・12月が例年よりも平均気温が高かったことにより入園者数が増加した可能性は否定できないと考えている。ただし、第3四半期は、ディズニー・ハロウィーンやディズニー・クリスマスといった、非常に集客力が強いイベントがあったことから、平日含めて集客力が高いことが、猛暑の振替や暖冬の影響であったのかはなかなか読みづらい。
- Q2) 海外ゲストの動向は10月発表予想対比で好調であったとのことだが、海外ゲストのモメンタムは下期になると落ち着いていき、入園者数の構成比における海外ゲスト比率は9%という前提だったと認識していたが、状況に変化があったのか。この3か月のインバウンド比率は、下期予想の9%より高かったという認識でよいのか。
- A2) 10月の修正予想では上期163万人の実績に対して下期120万人と、合わせて年間280万人と見ていた。その下期の見立ての前提としては、訪日外国人の地方の分散の傾向が進んでいこうと見ていた。実際は、想定したほど地方の分散が見られなかったのが事実である。この第3四半期での国別の実績は、東南アジア、北米、台湾、韓国の順に多かった。東南アジアは例年も第3四半期は多い傾向がある。台湾はコロナ前よりもインバウンド総数が増えており、特徴は、東京ディズニーリゾートに来るリピーターの方が多い。北米はコロナ前よりもインバウンド総数が増えており、日本に来るのが初めての方が比較的多く、そういった方は東京を訪れるため、その結果、東京ディズニーリゾートにもより多くお越し頂けたと考えている。また中国本土からのゲストは引き続き、回復の状況が遅れている。具体的な実数は回答していないが、この3ヶ月については、海外ゲスト比率は想定を上回っており、またインバウンド総数に対してどれだけ東京ディズニーリゾートに来園いただいたかという取り込み率も、コロナ前よりはやや高い傾向であった。
- Q3) 海外ゲストの中で、台湾のゲストでリピーターが増えているとのことだが、台湾に対してどんなアプローチをして、このような状況になっているのか。
- A3) 台湾のインバウンド総数がコロナ前よりもこの第3四半期は増えている。台湾の方の傾向としてはリピーターの方がそもそも多いので、台湾からのインバウンド総数が増えてくれば、東京ディズニーリゾートに来ていただく数が増えていくことになる。台湾に対してのマーケティング施策については、去年よりオンライントラベルエージェンシーの販路を整理している。台湾に限らずだが、来日してからの海外インバウンドのマーケティングとしては、引き続き、成田空港で広告の出稿を継続している。
- Q4) チケット価格の平準化への寄与を伺いたい。10月1日以降、1万900円で設定した日があるが、入園者数への影響はあったのか。平日の平準化は、第3四半期で進捗したのか。また、今後は、1万900円の日をより増やせるような状況か。もしくは更に上の価格帯の追加などはあるのか。

- A4) 10月から1デーパスポートの価格帯に9,900円、1万900円の2つの価格を追加し、最高価格帯と最低価格帯の差を3,000円とした6ラック制に移行した。こちらのチケット販売状況は、土日含めて好調に推移した。また価格帯の変更による来園意向の低下は、見られていないと考えている。第3四半期においては、ディズニー・ハロウィーン、ディズニー・クリスマスといった非常に集客力が強いコンテンツがあったことにより、平日の底上げされやすい時期であることや、海外ゲストの好調が継続したことによる平日底上げ効果もあったことによる平準化の効果はあったが、今回2つ加えた価格による価格差が平準化に効いてきたかは、なかなか見づらい状況であった。もう少し長い期間をとって、検証の必要があると考えている。
- Q5) 平準化について、6ラック制を敷いた結果として、第3四半期で複数日売り切れた日が発生しているようだが、平準化に対してどのような評価をしているのか。
- A5) 9,900円と1万900円と、この高価格帯のチケットについても休日含めて順調に消化できた。高価格帯のチケットはゲスト満足度への影響はなく、引き続き、コロナ前と同様の高いゲスト満足度を維持している。ただし、入園者数の上限を引き上げたことによって、アトラクションなどの待ち時間が長くなっていることは注視している。また、現在の価格帯がどれだけ平準化に効いてきたかについては、見づらいところがあり、海外ゲストやイベントによって左右されるところがあるため、長い期間をとって、検証してまいりたい。
- Q6) ディズニー・プレミアアクセスについて、上期も堅調に推移し、第3四半期においても好調さが継続しているようだが、インバウンドの方の使用率が高いということを以前伺ったが傾向に変化はあるか。例えば、使用頻度が上がったっているか、それとも下がっているのか、それとも横ばいなのか。加えて、国内ゲストも使用率が上がっているのかも情報があれば、教えてほしい。
- A6) 海外ゲストの購入動向は、従前から変化なく、国内ゲストの方よりもやや高い。また国内のゲストに関しても従前と変化はない。
- Q7) 今年度のガイダンスを、天候要素などを鑑み据え置くとのことだが、この直近で懸念するようなことが出てきていないのか確認したい。単純にここから先の天候要素を踏まえて、いったん据え置いているということでのよいのか。
- A7) 天候要素等を踏まえて、据え置いたが、懸念するような事項は生じていない。足元の状況はお答えできないが、第4四半期に入り、初開催のイベントであるディズニー・パルパルーザについては、ゲストからご好評いただいている。
- Q8) 第4四半期に関して、費用面において何か変化が出てきそうな要素があるか教えて頂きたい。
- A8) 中間決算発表のときにご説明させていただいたが、人件費にて一時金を支給見込みとしており、この第4四半期に連結ベースで約60億円計上する予定である。それに加えて、現在検討中ではあるが、追加で一時金の増額を検討しているところである。コストの出方としては、第3四半期から第4四半期への諸経費の時期ずれが数億あるが、今年度中には消化予定である。ほかのコストについても現時点では大幅に減額で終了するものはない見通しである。
- Q9) 好調であった第3四半期の結果を受けて、来年度の中期経営計画の目標に関して、前提を含めて変更することがあり得るのか、伺いたい。
- A9) まだ第4四半期を残しているが、仮に10月発表予想よりも上振れて着地した場合としても、その上振れた要因をしっかりと見極める必要があると考えている。その要因が、例えば、東京ディズニーリゾート40周年イベントが好調であったことが入園者数の増加要因であるならば、来年度は反動が見込まれるため、来年度の入園者数を増やすような修正

は難しいと考えている。また、今年度海外ゲストが好調だったとしても、来年度の海外ゲスト数は、海外ゲストが相応に回復するストレッチな見立てであるため、現時点では来年度の数字を更新することは考えづらい。

- Q10) ファンタジースプリングスの収益効果のアップサイドについて、現時点で発表している前提から、入園者数や単価に変更があり得るか伺いたい。
- A10) まず来年度の入園者数については、パーク全体で想定以上に海外ゲスト数が増え、平準化に寄与すれば、アップサイドはあると考えている。ただし、ファンタジースプリングスのエリアに限っては、エリア内でのゲストの安全と満足度を考えると、エリアのコントロールをしなければならないので、アップサイドはあまりないと考えている。単価については、まずは、2023年10月の価格帯変更によるゲストの動向を注視する必要があると考えている。ファンタジースプリングスの内のディズニー・プレミアアクセスについては、販売が好調である前提ですでに計画を策定しているため、アップサイドは限られていると想定している。
- Q11) ディズニーホテルの平均客室単価が対前年比較で4,000円近く上がっているが、来年度以降の傾向を伺いたい。ホテル事業においてもレベニューマネジメントを導入しているので、高稼働が続けば既存のホテルももう一段客室単価が伸び、さらにファンタジースプリングスホテルのグランドシャトーの客室料金が30万円であることを踏まえると、客室単価が平均6万円という目線も目指せるのではないかと考えているが、どう捉えているのか。更なる値上げの余地があるのか確認したい。
- A11) 第3四半期での客室稼働率と客室単価は、対前年でも対10月発表の修正予想対比でも、上回っている。東京ディズニーリゾート40周年イベントと海外ゲストの好調が寄与したことや、レベニューマネジメントによる効果である。加えて、オーバーレイルームとして、マーベルのアイアンマンをテーマにした客室や、東京ディズニーリゾート40周年イベントと連動した客室の販売による効果もあったと考えている。今後については、ファンタジースプリングスホテルについては、2月8日発売時点の6月6日の客室料金は、ファンタジーシャトーで6万3,500円～、グランドシャトーで30万円～として発表した。現時点では、この2つの客室料金のみお知らせしたが、このような価格帯の客室が加わることで、こういった客室単価が目指せるのかは今後検証していきたいと考えている。
- Q12) 今後の資本政策に関して確認したい。ファンタジースプリングスの設備投資がほぼ終わろうとしている中で、今後社債の返済が予定されている。今後設備投資が収まるならば、今後のキャピタルアロケーションに関して、来年度以降の考え方が変わっているか伺いたい。
- A12) 有利子負債は、足元の1月にて300億円の社債の償還が済み、今現在では、有利子負債は2,000億円程度になっている。この中で地震用に抑えている社債もあるため、実態の有利子負債の水準はその数値を下回っている認識である。今後のキャピタルアロケーションについては、エリアやアトラクションの開発など、将来の投資に関する検討をコロナ禍は止めていたが、ようやく昨年ぐらいから議論をしているところであるため、詳細な回答についてはお待ちいただきたい。
- Q13) パークのキャパシティについて、下半期より上限を引き上げた認識だが、上限の引上げは何合目までできたのか。計画のとおり進捗しているのか。もしくは、見極めているポイントがあるのかどうか伺いたい。来年度以降、ファンタジースプリングスを除いた場合、既存のエリアに関しても継続してキャパシティが引き上がっていくような絵姿を描いてもいいのか。
- A13) 2024年3月期に関しては、上半期は、コロナ禍でエンターテインメントを縮小した影響もあり、アトラクション等の待ち時間が長くなる傾向があったため、2023年3月期の下半期か

ら上限を引き上げていなかった。そして、パーク環境などを総合的に考慮し、入園者数の上限を10月より引き上げて運営してきた。まず足元のゲスト満足度については、この第3四半期は、コロナ前と同様のレベルで高い水準を維持しており、これはパレードなどのエンターテインメントの規模の復活が寄与したと考えている。ただし、上限を引き上げたことで、アトラクションの待ち時間がやや増加傾向にあり、今後のキャパシティについては、注視していきながら検討していく。

Q14) ジャンボリミッキーのキッズダンスプログラムが人気だが、どのように受け止めているのか。また、このプログラムが来園動機になり、業績への影響があったのか伺いたい。

A14) ジャンボリミッキーはお子様向けにスタートしたコンテンツであるが、月日や年度を重ねることによって、結果的に若年層を中心に、楽しんでいただけるように育ってきており、ゲストからは非常に好評いただいている理解である。ジャンボリミッキーが業績に与える影響については、数値として明確にお話することは難しい。今現在ではマネタイズ等の考えはない。

以上

注意事項

本資料の記載内容は、決算電話説明会の質疑応答をもとに要約した当社の見解であり、その情報の正確性および完全性を保証または約束するものではありません。また今後、予告なしに変更される可能性があります。

また、業績見通し等の将来に関する記述は、発表日現在の判断や入手可能な情報に基づくものです。当社グループの事業は、顧客嗜好・社会情勢・経済情勢等の影響を受けやすい特性を持っているため、本資料で述べられている予測や見通しには、不確実性が含まれていることをご承知おきください。